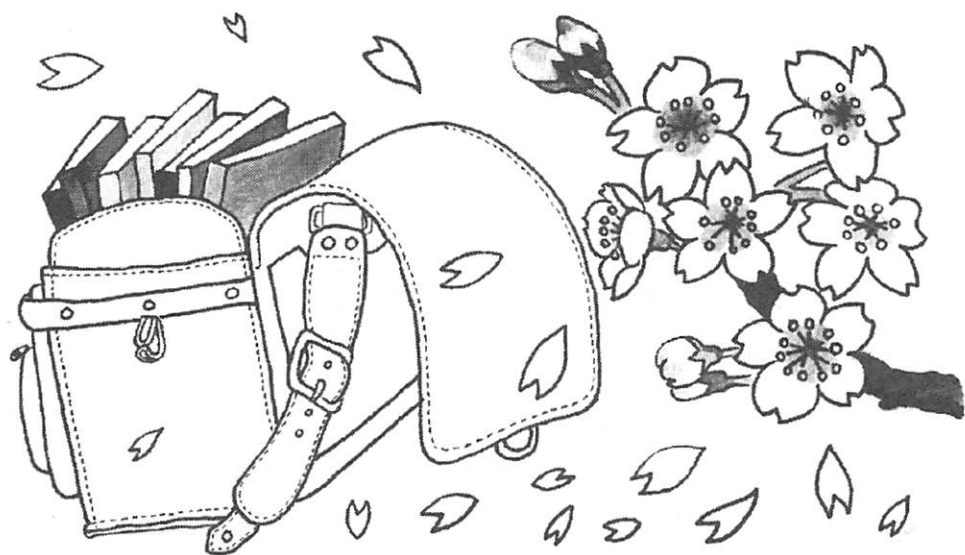


平17年  
4月号

250円

# やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



「親は子供が無用な事柄に興味を持ち始める前に、知識と科学によって子供の心を養ってあげなければなりません。なぜなら真実や知識といったものが欠けた魂は、ありとあらゆる種類の有害な考えが育てられ培養される畑のようなものだからです。子供達にまかされた種が何であれ、そこから収穫されるのもまたそれなのです。」 p.3

知識に期待されること

モチツとしたポテトボール

言葉がもたらす災いと純潔さ

近い将来についての言及

イスラームにおける教育と科学の重要性

『二番目に幸せなこと』The Next Best Thing

カレッジの小石～ちいさなわたしの、オクスフォード旅行記～8



編集部より	2
知識に期待されること	3
モチットしたポテトボール	4
カルブ（心・心臓）(Qalb) - 1	5
教育することの難しさ	7
挫折から学んだこと①(落とし穴)	8
言葉がもたらす災いと純潔さ	14
祈りのある毎日へ	15
近い将来についての言及	16
イスラームにおける教育と科学の重要性	17
復活（3月号からのつづき）	18
『預言者の子供教育法』より	20
『二番目に幸せなこと』	23
カレッジの小石～ちいさなわたしの、	
オクスフォード旅行記～8	25
アンネ。。。より	27
ハンズラー 殉教す	28



年度が改まり、決意も新たに抱負を抱いて新生活に踏み出す季節です。ふと小学校入学時の記憶が蘇りました。担任の先生は当初外で遊ばせるばかり。そのうち同級生の中から「先生、勉強はまだ？」という待ちきれない声が出始め、じゃあそろそろ始めようかということになったのです。先生は子供たちから自発的に学びたいという気持ちが生まれるのを望まれていたのでしょうか。

学ぶこととは本来、このようなワクワクする気持ち、喜びを伴うものなのだと思います。そして人間には元来、知らないことを知ることによって世界が開かれ、自己の目が開かれて歓喜を味わうことのできる、枠にはめられない知的好奇心が備わっています。学ぶことは生きる上で希望を与えてくれることでもあります。

こうした意欲を刺激し、満たし、人間形成していくのが教育です。教育は年齢を問いませんが、子供の教育が最重要であることに異論はないでしょう。しかしその方法論や内容、実際に現れる効果は時代の趨勢や社会の変化と無縁ではありえません。数年単位でころころ変わる不確かな情報も多く、親も子供も、教育者も社会全体も、それに翻弄され悪戦苦闘しています。

教育は目先の損得に影響されるものではなく、困難も多いこの人生をよりよく生きていくためにこそ必要だという大局的な見方を求めていきたい・・・言うは易し、行うは難しですが、無限の可能性を秘めた小さな我が子を前にそう思います。私たちがこの子の人生を損なわないようにと祈りつつ・・・まずは自分自身の生き方や生活態度を再点検し自省するところからでしょうか。今月のテーマは「教育」です。



“現実”の生活は知識を通じて成り立っており、学習と教授を無視するのはたとえ生きていたとしても“死んでいる”も同然です。私たちは、学びそこから得た知識を人々に伝えるよう創造されているのです。

分別のつく理性と理にかなった思考がなければ正しい決断はできません。科学や知識は人間の理性を啓蒙し発達させるものですから、科学と知識の恩恵に浴していない人々は正しい決断に達することはできず、詐欺に遭ったり惑わされる危険が付きまといまいます。

真に人間らしい人々は継続して学び、教え、他の人々に刺激を与えます。無知で学ぼうという意欲のない人々は本当に人間らしいとは言いがたいでしょう。同様に、教育を受けていても自己再生や自己改革に努めず、他の人々の手本とならない人々も真に人間らしいかは疑問の余地があります。

科学と知識は、人間の特性と創造の神秘を解き明かすものでなければなりません。どんな知識であれ、いかに科学的であろうとも、人間の本質にまつわる神秘や存在に関する闇の部分に光を当てるものでなければ、本物の知識とはいえません。

知識と科学を通じて得られた地位や功績は他の方法によるものより有益であり、なおかつ後世に残ります。これは二つの理由によります。まず知識を持っている人が来世に行ったとき、知識のおかげでこの世で得たレベルがこの上ない喜びを与えてくれます。加えて、知識はこの世で人々を不道德から遠ざけ、多くの美德を勝ち得るよう助けてくれます。

親は子供が無用な事柄に興味を持ち始める前に、知識と科学によって子供の心を養ってあげなければなりません。なぜなら真実や知識といったものが欠けた魂は、ありとあらゆる種類の有害な考えが育てられ培養される畑のようなものだからです。子供達にまかれた種が何であれ、そこから収穫されるのもまたそれなのです。

学ぶことの目的はその知識を人生における導きとし、人間性の完成に至る道を照らすことにあります。こうした役割を果たさない知識は学び手にとっては重荷となり、人間を崇高な到達点へと導かない科学はただのごまかしに過ぎません。

知識とは知そのものを知ること

知とは自分自身を知ること

人が自分自身を知らぬのなら

何のために人は学ぶのだろうか

(ユーヌス・エムレ)

学ぶ者にとって適切な言葉は恵みを供給してくれる無尽蔵の源となります。そうした源が備わっている人は新鮮な水の供給源と同じように人々から必要とされ、人々を良いものへと導いてくれるのです。根拠のない空想は人々の頭に疑念を生じさせ心を暗くしますが、絶望し混乱した魂が周囲をもがきまわっている“ごみの山”と同じようなものです。

科学やあらゆる分野の知識はほぼ全人類にとって有益なものですが、人々の寿命や資源には限界があり、一人の人がすべてを習得するのはおそらく不可能でしょう。それゆえ、あなた自身と広く一般の人々にとって役立つものを学び、使いましょう。人生を無駄にはしてはいけません。

本物の科学者は事実を反しない調査報告や解説、科学的実験に基づいて学問・研究を行います。そのため彼らの心は平穏で簡単に問題解決することができます。しかし真実を知らない科学者たちはしきりに目的や方法を変えては打ちのめされ、常に幻滅した状態にあります。

人は知識の深さと内容に比して尊敬され評価を得ます。ゴシップを広めたり無駄話に興じる人の知識はゴシップと無駄話に過ぎません。反対に本当に価値のある人とは、持っている知識を用いて事物の理解に役立つプリズムとし、また“宇宙”の隅々までを解明するための光とし、すべてを超越した真理に達しようとする人たちなのです。



## レシピーコーナー

### モチツとしたポテトボール

材料：4人分

じゃがいも...4こ

片栗粉...大さじ2

マヨネーズ...小さじ1

塩・こしょう...少々

作り方：

1. じゃがいもを柔らかくなるまでゆでる
2. ゆでたら、ざるにあげ水をきる
3. 熱いうちに、皮をむいてフォークでじゃがいもをつぶす
4. そこに熱いうちに、マヨネーズを加えて塩こしょうをして混ぜる
5. またそこに片栗粉を加えて混ぜる
6. 手で丸める
7. 油で揚げる



## カルブ (心・心臓) (Qalb) - 1

エルズルムのイブラヒーム・ハッキ氏の言葉に次のものがあります。

心はアッラーの家である。何であれ、アッラー以外のもが入って来ないようにしなさい。

そうすれば、夜、慈悲深きアッラーが彼の宮殿へと降りて来られるかもしれない。

「カルブ (心・心臓)」には2つの意味があります。1つは体の最も重要な部分、左胸にある松かさのような形をしているもの—心臓—を指します。構造や組織という側面において、心臓は体の他のどの部分とも異なっています。心臓には2つの心室と2つの心房があり、すべての動脈と静脈の起点で、また、心臓のみで動き、モーターや吸引ポンプのように働いて血液を動かしているからです。

スーフイズムの用語としては、生物学上の「カルブ」の感情や知覚、感覚、意識、思考、意志などという知性的精神的機能の中心という精神的側面—心—を意味します。これはスーフイーは「人間の真実」と呼び、哲学者は「ものを言う自我」と呼んでいるものです。個々人の本質というものはカルブに見出すことができます。この、存在としての知的精神的側面において、人は知り、認識し、理解することができるようになるのです。精神はこの能力の本質であり内的側面であり、生物学的な意味での精神もしくは魂は、そのための台座であると言えます。

アッラーが指されているのは個人のカルブについてであり、責任を負うのも、罰に苦しむのも、報奨を与えられるのも、真実の導きによって高められるのも、逸脱によって墮落させられるのも、栄誉を授けられるのも、屈辱を与えられるのもカルブなのです。またカルブはアッラーの知識が反映される「磨かれた鏡」でもあると言えます。

カルブは知覚するものであると同時に知覚されるものでもあります。カルブは精神の眼のようであるので、信仰する者は自分の魂や、身体、精神を貫くために使います。洞察はカルブの見るという能力、思考はその精神、意志はその内的エネルギーであるとみなされています。

カルブは一精神的知性と呼んでもいいかもしれませんが—その生物学的な側面と本質的につながっています。このつながりの性質について、哲学者たちやムスリムの賢人たちは何世紀にも渡って議論してきました。そのつながりの性質がどんなものであれ、生物学的な意味でのカルブと精神との間に近いつながりがあることには疑いの余地がありません。精神はアッラーが与えてくださった機能であり、真の人間らしさの核であり、人間のあらゆる感覚や感情の源であるのです。

聖クルアーンや宗教学、道徳、文学、スーフイズムにおいて、「カルブ」は宗教的な意味での精神を意味します。信仰、アッラーの知識と愛、宗教的歓喜といったものは、このアッラーから授けられた機能を通じて勝ち得る目標です。カルブは精神世界と物質世界という2つの側面を持つ輝く貴重な鉱石なのです。物質的存在や身体としての個人が精神に支配されているならば、精神世界から受け取る精神のほとばしりや贈り物をカルブが体に伝えることが出来、体が平安と静寂の中で呼吸することが出来るようになるのです。

上記のように、アッラーは私たちのカルブを重要に思われます。カルブは信仰する者の精神生活や人間らしさにとって不可欠なたくさんの要素—理性、知識、アッラーの知識、意志、信仰、知恵、アッラーの近くに居ること—の拠り所であるので、アッラーは男も女もそれぞれのカルブの質にふさわしく扱われます。もしカルブが生きてい

るのであれば、これらすべての要素と機能は生きています。もしカルブが病にかかっていたら、これらの要素や能力も健康であり続けることは難しくなってしまいます。誠実で敬虔な人預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）は次のように述べられています。『体には肉でできたある部分がある。もしそれが健康であるならば、体全体が健康である。もしそれが腐敗しているならば、体全体が腐敗しているのである。気をつけなさい！その部分はカルブである。』つまりここでは（精神的な）健康にはカルブが重要であるということが示されているのです。

カルブはもう 1 つの側面・機能を持っています。それは今まで述べてきたものよりも重要なものです。依存し、助けを求めるといった性質が人間の本質としてカルブにはあるということです。そして、それによって人間はアッラーを助けてくださる存在、維持してくださる存在として認識することができているということです。これはイブラヒーム・ハッキによって伝えられているハディースにははっきりと表現されています。

アッラーはおっしゃられた。「天も地も私を内に含めることはできない」

彼はカルブ自体によってカルブの中に隠された「宝」として認識されています。

個人の身体が個人の存在の物質的側面なのに対して、個人のカルブはその精神的側面を構成します。そのため、カルブはアッラーの知識について表すもの一直接の、雄弁な、最も明確で、光輝ある、真実の、という性質を持つ一であるのです。それゆえ、カルブはカバ神殿よりも価値があり栄誉あるものだとみなされ、被造物すべてによってアッラーを知らしめるように表現された、卓越した真実の唯一の象徴だとされています。

また、カルブは人間が健全な精神と身体と同様に健全な理性と思考を保つための砦でもあります。この砦にはすべての人間の感覚と感情が逃げ込み保護を求めることができ、カルブは感染から

守られなければなりません。もしカルブが感染してしまったら、回復するのはとても難しいことです。もしカルブが死んでしまったら、再生するのはほとんど不可能でしょう。聖クルアーンでは、私たちは次のように祈るように言われています。『主よ、わたしたちを導かれた後、わたしたちの心をそらさないでください。（3：8）』また、預言者ムハンマド（彼の上に平安と祝福あれ）は祈って次のように言われました。「おお、カルブを変えられるお方よ！私たちのカルブをあなたの宗教の上に固く打ち立ててください。カルブを保つことを私たちは絶対的に必要としているのだということをお忘れなさい。」

カルブはちょうど、すべての良いことや祝福を信仰する者に届けてくれる橋としての役割を果たすことができるのと同様に、悪魔の誘惑や物欲的な誘惑、邪悪なものが入ってくる手段にもなり得ます。カルブがアッラーに向いていてアッラーによって導かれているときには、体のどんなに遠くの部分にでもどんな暗い部分にでも光を届けることができるような映写機にそれは似ています。しかしもし物欲的なもの一得てしてそれは邪悪なものですが一に支配されてしまったら、それは悪魔の毒の矢の餌食となってしまいます。カルブは本来、信仰や崇拝、完璧な美徳といったものの家であり、宗教的感覚とともに流れる川、アッラーと人類と宇宙の関係から湧き上がってくるエネルギーの放射です。残念なことに、カルブの硬化一感じ信じることができなくなる一、不信仰、うぬぼれ、横柄、権力欲、食欲、過度の性欲、思慮のなさ、自己中心的なカルブ、地位への執着というような、無数の敵がこの家を壊し、川を堰き止め、放射の道筋を逸らそうとしています。





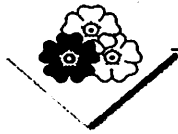
最近私が気になるニュースは母親が自分の子供を虐待し、死に追いやる事件や、自分の祖父母に危害を与え死に追いやる事件です。これらはすべて家庭内でおきた事件であり、深刻な事態であると考えます。どうしてこのような事件が起こっているのでしょうか？

子供が成長する上でまず見本とするのが親の姿です。特に母親は常に子供と一緒にいることが多いので、母親の存在は子供に大変な影響を与えるはずですが、しかし、周りを見渡せば、子供は幼稚園や、保育所へ行き、母親は仕事へと向かう姿が目につきます。そのために子供と過ごす時間が短くなっていることは事実です。だから、親が子供に接する時、より注意して子供と接することが重要になっていると思います。

インターネットが普及したこともあり様々な形で様々な情報が得られます。良い情報も悪い情報もすべて得ることができます。こういった社会の中で子供を育てることは容易でないと私は感じています。しかしながら、この子供をきちんと育てるといふ親の義務は決して失われない親の責任であると感じています。「子供は社会の宝」という言葉がありますが、まったくその通りです。今の子供が成長し、社会を支えるわけですから子供達の意識一つで社会が変わってゆきます。ただとても多くの子供達がいるので、もちろん完璧にすべての子供達を「善く」育て上げるのは不可能に近いことです。しかし、人が何か変化を求める時、強制的にあらゆる力を用いて強いる方法や、少しずつ理解と共に納得しながら変化を期待するという方法があるように、変化をもたらすことは決して不可能ではないのです。

では子供が成長する過程を見てみると、生まれた子供は親を手本とし、家族を手本とし、社会を手本とし成長します。そして成長して大人になりやがてパートナーを見つけます。そしてまた子供が生まれ、こうして社会はつくられてゆきます。ではこの子供が歪んだ道を選んだとすると、この子供が大人になった時、自分の子供に与える影響はどんなものなのでしょうか？もし歪んだ精神が受け継がれたならば、その子供が大人になった時その子供が受け継ぐ精神とはどんなものだろうか？遺伝子のように親から子へ、子から孫へ受け継がれていく過程で、常に修正が可能です。これは事実で、人が罪を改める姿は様々な場面で見ることができます。言葉ひとつとっても「ごめん」という言葉があるし、また刑務所で罪を償うといったこともあるでしょう。

例えばうそをつくことをやめられない人が決して嘘はつかないと心に決めることは大きな決心であり、その精神が子供に受け継がれれば、大変な変化になりますし、社会に与える影響も大きいはずですが、人は弱いものですから、どんなにきれいな「善」を見ても実行することができないこともあるし、また「悪」を拒絶できないこともあります。しかしまさに個人の確固たる決心によって社会に多かれ少なかれ変化をもたらすことができることは確かですなぜなら個人が社会の一部分を形作っているからです。



## 挫折から学んだこと①(落とし穴)

ハニーファ富岡貴子

「自分たちのために善いことを、あなたがたは嫌うかもしれない。また自分のために悪いことを好むかもしれない。あなたがたは知らないが、アッラーは知っておられる。」(雌牛章 2/216)

私はしばしばマイナスと思われるような体験から多くのことを学んだ。といってもその時にはなく、後になってから気付くことが多いのだが…。

私がこれまでの人生で、最も重要かつ一番大切なことを教えてもらったのは、修道院の修練とその挫折の体験だった。それは長い間、私にとって人生最大の汚点だと思っていた体験であるが、15年以上たった今、その体験を肯定的に受け入れられるようになり、この体験こそ、アッラーが私を愛し、私を成長させるために与えてくださった恩恵であることを確信している。

今回 2 回に分けてその体験（前半は修道院での修練、後半は修道院を出てから立ち直るまでの心の変遷）について分かち合おうと思う。

私は修道院での体験について長い間人に語ることはできなかった。それを思い出すのはあまりに辛かったし、語ると途中で涙が溢れてくるし、そのことに触れることができるほど私の心の傷は十分に癒えていなかったのである。しかしここであえて私の体験を紹介するのは、挫折と苦悩の日々はそこに価値を見出せるならばけっしてマイナスではないこと、むしろ学びのための大いなるチャンスであることを一人でも感じてくれれば良いと願うからである。

---

中学生の時、マザーテレサと出会った私はそれ以来ずっと彼女の修道会(MC)に入りたいと思い、東京のMCの支部にボランティアとして通い、20歳の時には自分の意志を確認し、本当にシスター達のように活動することができるのか確かめるためにインドに行ってボランティアをしてきて、「私にはできる」と自信を深めた。(この自信こそが落とし穴であることをそのときには気付かなかった)。

高校生の頃、世界史が大好きだった私は進路

を決める際、大学でもそれを学びたいという思いがあったし、一方でキリスト教を深く学び、修道院に入るために役立ちそうな知識を学びたいとも思っていた。教師になりたいという気持ちも芽生えてきていたので、両方を学ぶことができ、社会科学と宗教科の両方の教員免許が取れる清泉女子大学キリスト教文化学科に進学した。

学んでいるうちに私の関心は、より宗教科目(特に哲学・神学・聖書学・キリスト教学・宗教学)の方に向かった。大学で学ぶチャンスを与えてくださった神様に感謝の気持ちで一杯で、神様を愛したい、神様に近づきたい、もっと神様について知りたいという一心で、勉学に励んだ。大学の講義の後は他校の神学講座や一般向けの聖書学講座などにも出席し、朝から晩までひたすら勉強した。知識を求めることに貪欲で、学長からも「学生の鑑」と評され、成績も64科目(199単位)取得中1つ(演劇史は5段階でB)以外全てAだった。学科委員長にもなり、学会の活動や学生ミサ、カトリック研究会や聖書サークルなどの活動にも力を入れ、充実した学生生活を送っていた。

神様の話を聞いていると魂が喜び躍るのを感じたし、神様についての知識を持つことに純粋に喜びを感じていた。しかし一方で求めるものとは裏腹に、知識を得れば得るほど頭でっかちになって理屈っぽくなり、しだいに感性が鈍くなってしまふ感があった。ともすれば頭ばかりを働かせ、心が鈍くなり、純粋な信仰が失われていくようでもあった。

大学卒業後、私は長年の夢だったMCに入会し、修練を受けるために東アジア管区の香港に派遣された。

修道院で学ぶであろう事柄、“従順とは”、“謙遜とは”、“神に近づくために自我を捨てること”などは大学でも学んでいたし、信仰に関する書物も数多く読み、よく理解していたつもりだった。しかし、実際に修道会に入ってみると、そこで求められたのは理性でもって得られる知識ではなく、実践だった。

ベッドメイキング、裁縫、料理などはどれも私の最も苦手な分野で、何一つまともにできな



った。私のプライドは大いに傷つけられ、とても惨めだった。何もできない自分が悔しかった。

修道院では聖書のみことばを味わいそれを分かち合う時間があつた。聖書を読んで真っ先に私の脳裏に浮かぶのは聖書学で学んだ解釈だった。私はいつも「このみことばはこういう意味だと思います」というような答え方をしていた。無意識のうちに聖書学で学んだマニュアルどおりの正しい解釈を披露していたのだ。そのたびに管区長に「今は聖書の解釈を聞いているのではない。正しい答えを言うのではなく、あなた自身がこのみことばを神からのメッセージとしてどう受け取ったか、あなたの心で感じたことを言うのです」と注意された。当時の私はもうすでに心が鈍くなっていた。私の答えの何がいけないのか、心で感じたことを言うってどういうことなのか、その時の私には管区長の言っている意味がよく理解できなかった。

また私はいつもいつも管区長と修練長から「頭を働かせるのをやめなさい。あなたの思考をストップさせなさい。考えたり判断したりするのを止めなさい」と言われた。哲学をかじった私はそのたびに、生意気にも反発を覚え、考えることは神様が人間に与えられた能力ではないか、バスカルが「人間は考える葦である」と言ったように、理性を持ち考えることができるから人間はすばらしいのではないか、それを放棄することは神が与えてくれたタレント(能力)を放棄することにもなるのではないだろうか、とあいかわらず次から次へと疑問がうかび、頭を忙しく働かせていた。私にとって最も大事な忠告を、私の卑小な頭は別の次元でとらえ、管区長の言っている真意を全く理解できなかったのだ。

ある日、カラスに糞を落とされた。私は修練長に髪を洗う許可を求めた。「今日は何曜日ですか?」「水曜日です」「髪を洗う日は何曜日ですか?」「火曜日と土曜日です」「ではその日に洗いなさい」私は3日間、不快な思いに耐えなければならなかった。

修練では常に“犠牲と従順(己を無にする)”が求められた。

修道院に入つてすぐのこと、朝食には一杯の水を飲んで食事を始め、コーヒー(紅茶の時もある)があつた。給仕係のシスターに「私はコーヒーが飲めないで、注がなくて結構です」と言ったが、「ごめんなさい。これは私の仕事だから」と言ってコーヒーを注いだ。私は心の中で“融通の利かないシスターだな、何て頭が固いんだろう”と思った。片付

けで台所に移動する際にいつもコーヒーを庭に捨てていた。ある日、管区長がシスター達を前に「雨が降ったわけでもないのに、庭の草が泥水で汚れている」ときりだした。私は手をあげて「すみません、私がコーヒーを捨てたのです」と言った。私だけその場に残された。「なぜあなたはコーヒーを飲まないのですか?」と訊ねられたので、「私はコーヒーを飲むとドキドキしてきて気持ち悪くなり、吐いてしまうのです」と答えた。すると「それはあなたの思いであつて、神の思いではない。これは犠牲と従順を学ぶよい機会です。飲めないなら、二杯飲みなさい」そして、従順の例としてある修道士の話をした。「上長の命令で穴を掘りなさいと言われた修道士は穴を掘り、その後、上長から穴に土をかけて元に戻すように言われ、黙ってその通りにした。この穴を何のために掘るのか?とかなぜまた元に戻すのか?とか考えたり疑問に思ったりせず、ただ神の愛ゆえに上長の命令に従った。それが従順です」

なんてこと。そんなの盲従ではないか、口には出さなかったが、心の中で反発を感じていた。それから毎日コーヒーを飲まなければならなかった。そして吐く日々が続いた。結局二杯から一杯になり、更に水で薄めて飲む許可がでたが、それは私にとって拷問のようだった。いったいこの修練に何の意味があるのだろうか?この苦行からいったい何が学べるというのだろうか?ナンセンスだ。ただのいじめではないか。私の心は離れていく一方だった。

修道院の修練はボランティアとして外側から理解していた私の予想をはるかに越えていた。大学で勉強したことが何の役にも立たないように感じた。しかし実はこの修練こそが私が大学で学んでいた“神に近づくために自我を捨てる”訓練の実践だったのであるが、そのときは全くそのことに気が付かなかつた。マザーテレサのシスター達の活動は単に人助けや奉仕活動ではなく、信仰に基づいたものであり、神への愛ゆえの行動なのだ。もしかしたら私はボランティアの視点から彼女たちの活動と奉仕に惹かれていたのかもしれない。彼女達は実に修道者、“神の愛”の宣教者なのだ。それは“無私”にならなければできない。そのためにもこの厳しい修練は必要だったので。この修練の価値を認めるのに私は長い歳月がかかった。

従順も自我を捨てることも理解しているつもりだった。しかし私の理解は頭だけのものであり、体得していなかったのだ。修道院での体験で私は“知っているつもりになっていたが、実は何も知

らなかった”ということを知った。

私は内なる沈黙を完全に破っていたが、一度も心の内の葛藤を話さず、不平不満を口にしたことはなかった。ただ「YES」と言い、黙って従っていた。それが従順なのだと思っていた。外見上は従順に振る舞っていたが、私の頭の中は疑問だらけ、心は離れ、反発と不信感で一杯だった。そのうち私は心のバランスを失い始めた。私は偽善者ではないだろうか？心が離れているのにここにとどまることは神と自分の気持ちを偽ることになるのではないだろうか？他のシスター達は純粋な信仰を持ち心から従順に従っているようにみえた。それに比べ、疑問だらけの私には純粋な信仰がないと思うようになった。(退会した後で東京のMCのシスターに修練の時の心の内を話したら「なぜ管区長と修練長にあなたの心の内を話さなかったの？皆あなたと同じよ。あなたと同じ思いを抱えて修練していたのよ」と言われ、そうだったの？と早まった思いもしたが、修道院を出たということは神は私にそれをお望みではなかったということなのだろう。)

形は従順に従っているが、心は従順ではない自分に対して良心の呵責を感じるようになっていった。しかし一方で、自分の無力さ、惨めさ、信仰の弱さを認めたくないという気持ち(プライド)もあった。ここを逃げ出したいという気持ちと同時に日本に帰るのが怖いという気持ちもあった。胸が締め付けられるほど苦しくなった。

そんな中でもとても素晴らしい体験もした。それは、「マスク(仮面)を取れ！」というテーマの8日間の黙想会だった。霊的指導者である神父様の導きに従い、沈黙のうちに自分の心を正直に深く見つめ、自分の心に付けているマスク(プライド、驕り、頑固、偽善、虚勢、嫉妬、見栄、人からよく思われたいなどの自我)をはずす作業をし、心を浄化していくのだ。なぜならば、心こそ、神が語りかける場所であり、神を知る場所、信仰の宿る場所であるから。その心が曇っていれば、神の言葉を素直に受け取ることができない。だからこそ心の浄化は必要なのだ。「己を知る者は神を知る」とはこういうことだろう。黙想会は自分の心を正直に見つめ、自我に気付く、心を洗い清めるよい機会だった。神に自分の心の内をありのままにさらけ出し、導きをひたすら祈った。

結局、私には修道者になる信仰がないと判断し、修道院を去ることにした。管区長は「あなたはきっとここに戻ってくる」と言った。その予言とお

り、私は数年後また修道生活にあこがれ、(教育修道会も考えたが修道会に入るなら徹底して厳しい会に入りたく)、再びMCにボランティアとして通ったが、二度と修道会に入ることはなかった。だが、結婚してイスラムになった今もその修練と同じもの(自我を捨てるための修練)を緩やかではあるがイスラムの日常生活(信仰生活と結婚生活+子育て)の中で生きようとしている。

たまたま修道院を去るときの聖書のみことばが「はっきり言うておくが、子供のように神の国を受け入れる人でなければ、けっしてそこに入ることはできない」(マルコ 10: 13-16 参照)で、まさに自分のことを言われているような気がして、神は私に真理を隠されたのだと悲しくてずっと泣き続けた。

---

修道会を出てからずっと知識を持ったことが信仰の妨げになったのだと思っていた。

イスラムに改宗してからも神学に関するような書物を読むと頭でっかちになり心が鈍くなった記憶がよみがえり、読むこと自体に抵抗を感じていた。また知識を得ることについても先の失敗を繰り返すまいといつも警戒していた。

しかし最近気が付いた。私はずっと知識を持ったが故に心に覆いがかけられ信仰が妨げられたのだと思っていたが、そうではない、知識が信仰を邪魔したのではなく、知識を持つことによって無意識のうちにおこる(「私は知っている」という)“心の驕り”と“プライド”が信仰を妨げていたのだと気付いた。

アッラーについての知識を持つことがイコール“アッラーを知ること”ではなかった。もちろんその助けになることはあるが。“アッラーを知る”には心を浄化させること、そして最終的にはアッラーからの導きが必要不可欠だと感じている。

真の知識を持ち、アッラーを畏れる者の特長は謙虚さだと思う。私はまだまだ自我との闘い、魂の清めが必要だ。

「アッラーの御許で最も貴い者は、あなたが大の中最も主を畏れる者である」(部屋章 49/13)

マスルーク(ハディースをまとめたイスラムの師)の言葉に「アッラーを畏れる者はそれだけで知者であり、自らの行為を誇る者はそれだけで無知である」とあるが、心を浄化させ、アッラーを畏れる心を持つことこそが信仰と全てのイバーダの

基本であると思うようになった。どんなたくさんの知識を得たとしても、心がアッラーから離れ、それを生きる（実践する）ことがなければ、それは役に立たない知識になってしまう。

しかしこの実践にも気をつけなければならない落とし穴がある。

最近私は自分が硬くなってきているのを感じる。これは危険だ。自惚れ、傲慢、強情、頑固、見栄、虚栄心、自己弁護、正当化、独善、自己満足、自己中心、排他的、不寛容、人への厳しい言葉や態度、反発、批判、疑い、邪推、嫉妬、臆病、細かいことへのとらわれ、つまらないことへのこだわり、イライラ、無気力、怠惰、惰性のイバーダ、倦怠感などは信仰が低下していることの表れだ。

シャリーアを守ることやイバーダに精出すことにも落とし穴があると感じている。気が付かないうちに戒律や崇拜行為そのものが主になってしまい、本来の主であるアッラーが横に置かれてしまうという落とし穴である。「些事にこうでいるものは滅びる」というハディースもある。細かいことばかりにとらわれ、戒律を守ることばかりで頭がいっぱいになり、いつしか心がアッラーから離れ、本来の信仰を見失い、戒律そのものが主になってしまう。あるいは本来アッラーのために行う崇拜行為のはずなのにいつの間にか崇拜行為を行うこと自体が目的になってしまうことがある。

また戒律を遵守し、イバーダを多くしていることで、自分は正しい信仰者だと優越感を持ったり驕り高ぶり高慢になって、ノンムスリムや戒律を遵守できないような立場にいる人やイバーダを怠っている人を見下したり、人を裁いたりするという落とし穴もある。これは聖書にもあるようにイーサーが激しく非難したところのパリサイ派や律法学者の態度そのものである。それは最もアッラーから嫌われる行為で、それこそ地獄の炎に投げ入れられるほどの罪を犯していることになる。自分のうちに僅かでもこういう傾向を感じる時、私はひどく自己嫌悪に陥る。

厳格になればなるほど知らず知らずのうちにこういう落とし穴にはまってしまう人は多い。そういう人を見ると嫌悪感を感じていたが、いやいや、人をナスィーハ(忠告)しようとする前に自分を見つめ、自分自身の心にナスィーハした方がよい。自分にもそういう傾向があるではないか。恐ろしいのは気が付かないということだ。人は傲慢である時、その傲慢さに気が付かない。

自分が日常目にする言葉は誰か他の人のための言葉ではなく、自分自身へのアッラーからのメッセージでもある。本を読んでいて忠告を目にすると“これはあの人のことを言っているようだ”と思うことがあるが、そう思う自分自身(無意識のうちに人を裁いている自らの傲慢さに気付かない)にこそ、その忠告は与えられたものであると謙虚に受け止められるようになるには、心を研ぎ澄まし、自分自身をよく知らなければならない。

「人を責める心で自分を責め、己を許す心で人を許せ」とはあるお寺の門に掲げてあった言葉だが、ギュレン師も「人には弁護士のようであれ、自分には検察官のようであれ」と仰っている。

心の中に知らず知らずのうちに忍び込み、信仰を墮落させ、アッラー以外のものに心がとらわれていくこと(小さなシルク(多神))のないように、常に自分の心の中をチェックし、タズキヤ(心を浄化)し、自分の心にいつもナスィーハ(忠告)する必要があるように感じている。それは自らを縛ることではなく、解放することなのだ。自分がとらわれているものや自分を縛り付けているもの(我執、我意我欲、自我)を発見し、そこから解放されて自由になることなのだ。そしてそのときにこそアッラーに満たされていると感じることもできるのだ。

「アッラーよ、私が無気力、怠惰、臆病、吝嗇(りんしょく)、毫碌(もうろく)などの状態にならぬよう、また墓での災いをうけぬようお守り下さい。アッラーよ、私の魂を真摯たらしめ、清めてください。あなたは最もよく清める御方です。あなたは、また、魂を守る友であり、保護者でもあります。アッラーよ、私たちが役に立たぬ知識や謙虚さを忘れた心、また、満たされない心などを持った時、更にまた、あなたに受け入れられない祈願を行なったりすることがないように、私たちをお守りください」(預言者様(SAW)の祈り：「サヒーフ ムスリム」第3巻 p.619)

\*\*\*\*\*

・いや、人間は本当に法外で、自分で何も足りないところはないと考えている。本当にあなたの主に(凡てのものは)帰されるのである。(凝血章 96/6-8)

・他人に対して(高慢に)あなたの頬を背けてはならない。また横柄に地上を歩いてはならない。本当にアッラーは、自惚れの強い威張り屋を御好みになられない。(ルクマーン章 31/18)

・アッラーは、あなたがたが心の中に抱くこ

とを熟知しておられることを知れ。(雌牛章 2/235)

・心の中にからし種の実ほどでも信仰を持つ者は、地獄に落ちることはない。また、心にからし種の実ほどでも高慢さを持つ者は、天国に入ることとはできない。(「サヒーフ ムスリム」第1巻 p.74)

・虚栄心がもたらす高慢さは真実を軽んじ人々を軽蔑するもとなるものです。(「ムスリム」第1巻 p.74)

・アッラーのみ使いは、「些事にこうでいる者は滅びる」といわれ、三度この言葉を繰返された。(「ムスリム」第3巻 p.589)

・本当にアッラーはあなた方の体や外見をご覧になるわけではなくあなた方の心をご覧になっているのです。そして彼は彼の指で胸を指しました。(「ムスリム」第3巻 p.524)

「真の知識とは、その所有者に畏怖や恐れ(と希望)を増すものである。

・信仰者は罪に負けても、常に悔い改める者である。」(ガザーリー)

「ひととは考える、『人間は斯々の事物から逃れ、斯々の事物を求めなければならない』と。そしてその事物とはすなわち場所であったり、人間であったり、方法であったり、思想であったり、あるいはまた職業であったりするるのである。しかしそうした事物方法がお前を妨げるといふとき、その罪はそれらのものにあるのではない！むしろお前を妨げるのは、それらのものの中に存在するお前自身なのである。それらのものの中においてお前がお前自身を正常でないやり方で執持しているということ、そのことに原因があるのである。それ故にまずお前自身からはじめ、お前自身を棄てなければならない。

・まことに、真に神の意志の中へと移された人は、彼が以前に陥った罪については、それが起らなかったらよかったとは思わないはずである。もちろん罪は神に背いたものなのであるから、その限りではそんなことはいえないが、他方お前は罪を犯したからこそ一層大きな愛に結ばれたのであり、神に背いて行動したからこそ - ほんとうにその故にこそ - 卑くせられ、謙らしめられたのである。たしかにお前は、もし神がそこからお前の最善を引出そうと思ひ給わなかったならば、決してお前にそのような運命をあたえ給わなかったであろうことにつき、神を充分信頼している。」(M・エックハルト「神の慰めの書」)

「人は生まれつき、知りたいと望む。けれども多く知ったところで、神を畏れる心がなければ、なんの役に立とう。

・多く知り深く学ぶほどあなたの生活がいよいよ聖にならないならば、それだけあなたは厳しく審判されるだろう。それゆえどんなに技芸や学問があっても高ぶってはならぬ。むしろあなたに与えられた知識のために恐れ慎むべきである。もし自分は知識が豊富であり、理解が深いと思われることがあったら、自分の知らないことはまだそれよりたくさんあるのだと思うがよい。

・最も高尚で有益な学問は、ほんとうに自分というものを知ってこれを軽んずることである。自分をつまらぬ者と思い、他人を自分よりよい人偉い人と尊敬するのは、大きい知恵であり完全である。あなたはたとい他人が公けに悪事を行ない、または重大な罪を犯すのを見たとしても、自分がかれより善良だなどと思ってはならぬ。なんとなればあなたのその善良な状態は、いつまで続くかわからないからである。私たちはみな弱い者である。しかしあなたは自分ほど弱い者はほかにないと思うがよい。」(トマス・ア・ケンピス)

・子供のとき、わたしは祈りにも信心業にも熱心な、信仰の厚い少年でした。ある夜、父親といっしょに、「クルアーン」をひぎに徹夜の礼拝をしていました。その部屋では、ほかの人々は皆まどろみはじめ、やがてぐっすり睡眠してしまいました。そこで私は父に言いました。「だれもかれもが眠ってしまい、目を開こうとも、頭を上げて祈ろうともしませんよ。まるで皆死んでいるみたいだ」父は答えました。「愛する息子よ、人の悪口を言うくらいなら、あの人々のおまえも眠ってしまったほうがよかったのだ」自分を正しいと思ひこむことは、祈りや信心行為をしようとするとき、人々が特に陥りやすい危険です。(シラズのサーディ)

<「マザーテレサ日々のことば」より>

・神を知ることはあなたに愛を与え、自分を知ることは謙虚さを与えます。

・もしあなたが謙虚ならば、ほめ言葉も不評も、あなたを害するものはありません。なぜなら、あなたは自分が何者なのかを知っているからです。

・謙虚であるということは、常に神の偉大さと栄光の光を放っているということです。謙虚であることを通して愛することができる人に成長するのは、謙虚さは、聖性の始まりです。

・聖くなるための道は、祈りです。

・もし、ほんとうに祈りたいのなら、まず聴くことを学ばなければなりません。心の静けさの中で神は語りかけられるのです。そしてその静けさがわかり、神を聴くことができるには、清い心が必要なのです。心が深く神に満たされると、自然とことばや思いがわき出てくるのです。

・汚れなく、聖い心とは、心が開かれている状態です。開かれた状態とは、完全な自由、つまりどんな妨げや障害にもかかわらず、神を愛することを可能にしてくれる無私の状態を意味するのです。過ちが生活の中に入り込んでくると、それは神と私たちの間で本人の内部の障害となります。過ちは、私たちを囚われた者とするにほかならないのです。

・私たちが、自分自身の無価値やはかなさに気づいた時のみ、神はご自身で私たちを満たしてください。

・もしあなたが、がっかりしたのだとしたら、それはあなたのうぬぼれの表れです。それはあなたが、あなた自身の力を信じていることを表わしているからです。あなたの自己充足感、あなたの自己中心、あなたの知的なプライド、これらは、神があなたの心の中に訪れてくださることを抑えてしまうでしょう。なぜなら、神はすでにいっぱいのもを満たすことはできないからです。

・私たちは神を見いだす必要があります。神を、騒がしさや落ち着きのないところで見いだすことはできません。神は静けさの友です。自然を御覧なさい。木や花、そして草は静かに成長していきます。星や月や太陽をご覧なさい。なんと静かに動いているのでしょうか。沈黙の祈りのうちに多くを受ければ受けるほど、私たちの活動においてもっと多くを与えることができます。大切なことは私たちが言っているのではなく、神が、私たちにおっしゃること、そして、神が私たちをとおしておっしゃっていることなのです。

・神のお顔を見ることができるとは、全

く汚れなく、透明で、自由な心が必要です。

・愛の働きであっても、仕事のための仕事にしてしまう危険性はいつでもあります。だれのためにしているのかということをおぼえてしまうと、それが落とし穴になるのです。

・どれだけたくさんのおこなうかが問題なのではなく、どれだけたくさんのお愛をその行為にこめるかが大切なのです。

・あなたは神に包まれ、神に守られ、神の中でおよいでいるということを考えなさい。

・よく電線を見ますよね、小さかったり大きかったり、新しいものや古いの、安いものや高そうなの。でも、電流が流れていない限り電線は役に立たず、明かりはともらないのです。電線はあなたや私、そして電流が神です。私たちには、私たちを通る電流を流すこともそれを拒んで暗闇が広がるのを許すこともできるのです。

・「自己からの解放」

主よ、私は信じきっていました。私の心が愛にみなぎっていると。でも、胸に手を当ててみて本音に気づかされました。私が愛していたのは他人ではなく、他人の中に自分を愛していた事実。主よ、私が自分自身から解放されますように。

主よ、私は思いこんでいました。私は与えるべきことは何でも与えていたと。でも、胸に手を当ててみて真実が分かったのです。私の方こそ与えられていたのだと。主よ、私が自分自身から解放されますように。

主よ、私は信じきっていました。自分が貧しいものであることを。でも、胸に手を当ててみて本音に気づかされました。実は思いあがりとおたみとの心に、私がふくれあがっていたことを。主よ、私が自分自身から解放されますように。

主よ、お願いいたします。私の中で天の国とこの世の国々とはまぜこぜになってしまうとき、あなたの中のみ真の幸福と力添えとを見いだしますように。(マザーテレサの祈り)



言葉がもたらす災いと純潔さ

預言者ムハンマドは次のように言われた。

「誰であれ、その両あごの間と、両足の間の事について私に約束し、保証する者に、私は天国のための保証人になろう」<sup>1</sup>

これを語られたのは預言者ムハンマドであり、このお方は人間が何を保証できて何を保証できないか、誰よりもよくご存知でおられる。天国を保証するとこのお方が言われたのであれば、必ずそれは保証されるであろう。なぜなら、兄弟のように親しかったウスマーン・ビン・マズウンのような教友について、その妻が「あなたは天国の鳥となって行ってしまった」と言ったのに対して「私はアッラーの預言者であるが、私にもそれはわからない。あなたは彼が天国に行く事をどこから知ったのですか」<sup>2</sup>と言われるお方でもあるからである。

つまり、その言葉と、自分の下半身をコントロールすることを約束し、その約束を守る人には、預言者は天国を約束され、これも決して適当に言っておられるのではないのである。必ず、アッラーがこの事について彼に知らされた事に基づいて語られているのである。

そもそも預言者ムハンマドはいつでも、そのようにされていた。その逆のような状態に陥ることはなかったのである。そのお方が言われることは従って常に事実であり、真実である。その約束も、定められた時が来れば必ず実現する。

もしあなたが自分の話すことに注意を払い、性的なことでも純潔を守っていれば、もしあの世で、懲罰の天使があなたを捕らえて地獄へ連れて行こうとしたとしても、あなたは大声で預言者があなたの保証人である事を訴えることができる。あなたのその声に、預言者は駆けつけ、赦しを乞う仲介をしてくださり、保証人になってくださるであろう。

話すことは恵みの一つである

そもそも人の口は、話せるという恵みの持ち主である。その価値が計り知れないほど大きな器官なのである。ただしこれほどの器官でも、悪い事に使われた場合人を破滅や災いに導く最も危険な道具と化す。人は口でもってアッラーの御名を唱え、偉大さを知り、善を命じ、悪を禁じるのも口である。人は口で聖クルアーンを読み、その節を読み、それを他人に説明する。時には、信じない人を説明する事によって信仰に導く。このようにして、何よりも価値のある事を行なった事になり、人はその口によって、天国の最も高いところをも獲得することもできる。

しかし、口は人の破滅を用意することもあり得る。全ての憎悪や裏切りの媒介となるのは口である。アッラーやその使徒をののしる者は、その恐ろしい罪を口でもって犯しているわけである。嘘、陰口、非難、

<sup>1</sup> Bukhari, Riqaq 23

<sup>2</sup> Bukhari, Jana'iz 3; Ibn Maja, Jana'iz 7; Ibn Hanbal, Musnad 2/335

それらは全て口で行なわれる。人はその口によって、ムサイリマ（偽りの預言者）の嘘の穴にさえ落ち込むことがあり得るのである。

このように預言者ムハンマドは、これだけの言葉で、この器官に注意をひきつけられている。これだけの言葉に、まだ今まで書かれてこなかったもっとたくさんの真実が秘められているのである。我々がここで少し触れたことも、その中の一つである。

「口は、適切な形で使いなさい、私もあなた方に天国を約束しよう」という事を伝えているのである。これは「口を閉じて、隅の方にいなさい」という意味ではない。適切な形で使いなさい、ということなのである。

祈りのある毎日へ



寛容と恵みの持ち主よ

恩恵と強い力の持ち主よ

信頼と安全の持ち主よ

聖なるすばらしいお方よ

英知によって明示し給う方よ

哀れみとともに、受け入れ給うお方よ

数々の存在の証を造り給うお方よ

偉大なる権力の持ち主よ

赦し給うお方よ

慈しみ深く、援助し給うお方よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。私達を地獄からお助け下さい。<sup>3</sup>

<sup>3</sup> 偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌルカビール）には、祈願（きがん）、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子（ジャウシャヌカビール）が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



## 近い将来についての言及

### 2. 戦勝の吉報

ブハーリーと、アブー・ダーウードの「スナン」で、ハッバブ・ビン・アラットが伝承している次の出来事について見るることができる。ここでは彼自身の言葉に耳を傾けてみよう。

「苦しみの多かったある時代、預言者は覆いを頭からかけられ、カアバの蔭で座っておられた。どのようなことが彼に対してなされたのか、誰にもわからない。当時はそういう時代であった。無知な者たちは全ての道具をムスリムたちに対して武器のように使っていた。私は当時、まだ解放されていない立場であった。私の持ち主や他のマッカの住人たちが私に対して行った拷問が、もはや耐えられない段階に達していた。預言者ムハンマドが一人でおられたので、私は近づきそして言った。

『預言者よ。アッラーに祈って、アッラーの御加護を求めてくださいませんか』

彼は預言者ムハンマドがすぐに祈られると思っていた。さらに、クライシュ族に対して呪いをかけられるとも予想していた。しかし預言者ムハンマドは彼に言われた。

「アッラーに誓って言うが、あなた方以前の者は、もっとひどい拷問を受けたのだ。彼らは、溝の中に寝かされ、鉄ののこぎりで体を二つに切断されたりした。しかし、それでも、教えから戻る者はいなかった。肉が骨から離れても、教えを放棄することはなかった。アッラーはこの教えを完成させられるであろう。ただあなた方は焦っているのだ。いつか、女性が一人で、ヒラー(マッカにある山)からハドゥラムトまで、野生動物以外の何者も畏れることなく旅ができる日が来るであろう」そしてハッバブは明言する。

「預言者のおっしゃられたことはその通り実現した。私自身の目でそれらを見たのだ」<sup>4</sup>



<sup>4</sup> Bukhari, Manaqib 25; Ikrah 1; Abu Dawud, Jihad 97





## イスラームにおける教育と科学の重要性

今の世界を見ると、イスラームの先進国は一つも存在しません。また、多くのイスラームの国々は発展途上国です。これらの事実から、イスラーム教では科学や教育が重視されていないのではと勘違いしがちです。しかし、イスラームでは学ぶことは非常に大事です。例え明日に死ぬと分かっている、人間に学ぶ義務があるとされています。たくさん学ぶとアッラーをもっと理解できます。これについてクルアーンでは以下のように述べられています。

また人間も鳥獣家畜も、異色とりどりである。アッラーのしもべの中で知識のある者だけがかれを畏れる。本当にアッラーは偉大ならびなく寛容であられる。

ファーターイル（創造者）章 28 節

イスラーム社会では今から 14 世紀も前の時代に社会的な教育が行われていました。歴史の中でも、今日でも多くのムスリム科学者たちが科学の発展に貢献しています。

皆様ご存知、マドラサ（イスラーム学校）はイスラーム社会における最も古い教育機関です。マドラサより以前に、イスラーム世界での教育活動がモスク、学者の自宅、宮殿や本屋のようなさまざまな場所で行われていました。イスラームではモスクが誰でも入れる公民館のような場所です。モスクが宗教活動にとって欠かせない空間として存在していて、後にモスクが宗教教育のみならずさまざまな教育のために使われるようになりました。

イスラーム史を見ると、最初に改宗したサハーバ（預言者の友人）たちがひそかに預言者（彼に平安あれ）の友人の一人であるアルカムの家に集まり、預言者からイスラームを学んでいました。このアルカムの家がイスラームのマドラサの原型

だと言われています。ダールルアルカーム（アルカームの家）は、イスラーム教で最初のマドラサとしても知られていて、教育機関のことは預言者の時代の記念にまだダールルアルカームとも呼び続けられています。ヒジラ（預言者の指導でムスリムたちのマッカからマディーナへの移住）後マディーナを中心にイスラーム国家が建てられ、すぐにマディーナにマスジダンナバウィ（預言者モスク）が建てられました。ここはイスラーム教育の中心となりました。ムスリムたちにとって礼拝の場だけでなく、クルアーンやイスラームに関する勉強をしたりして、自身を改善する場でもありました。預言者がその後、需要があったためマディーナの他の地域にも似たような教育センターを設立させました。マドラサ教育は 4 人のカリフの間にも同じように継続しました。

マドラサでは宗教的な知識だけではなく時の科学である、天文学、数学、幾何学と医学のような科学が同じく重要な科目として教えられました。後に、西洋の言語での授業や、ペルシャ語、歴史、地理、天文学、力学、三角法、化学、ペインティング、身体訓練、衛生学、社会科学、哲学、経済学と金融がカリキュラムに加えられました。

クルアーンの中で最初に預言者に降りた節は以下の節です。

読め、「創造なされる御方、あなたの主の御名において。一凝血から、人間を創られた。」読め、「あなたの主は、最高の尊貴であられ、筆によって（書くことを）教えられた御方。人間に未知なることを教えられた御方である。」

アル・アラク（凝血）章 1-5 節

これらのことからマドラサから始まったイスラームにおける教育はどれだけ重要かは分かります。

## 復活 (3月号からのつづき)

## 五つめの論拠

見なさい。ここで行なわれていることから、この比類なきお方は大きな慈悲の持ち主であられることが見て取れる。なぜなら、災いの中にある全てのものに対して救いに駆けつけられておられるのだ。全ての問いかけや望みにお応えになられている。そして、見なさい！最も些少な存在である被支配民に対してさえ、その憐れみは向けられているのである。一人の羊飼いのほんの一頭の羊の足が傷ついた時でさえ、薬や獣医を遣わされるのである。

さあ、来なさい、一緒に行こう。この島に、大きな集団が存在する。諸民族からの有力者がそこに集っている。見なさい！大きな勲章を身につけた慈悲深い副官が演説を行っている。憐れみ深い彼らの支配者からいくつかのことを求めている。全ての人々も「そうです、我々もそれを求めています」と言っている。その副官を認め、証言している。聞きなさい、支配者が愛されるこの副官はこう言っている。

「我々を恵みによってはぐくまれる我々が支配者よ。我々にお示しになられた例え、そしてこの影をうつしている存在、源を我らにお示してください。我々をこの国の中枢に招いてください。我々をこの砂漠で破滅させないでください。あなたの御前にいさせてください。我々にここで味あわせてくださった素晴らしい恵みを、どうかあの世でも受け取らせてください。我々を破滅させ、遠ざけるといって罰さないでください。あなたを熱心に愛し、感謝するこの従順な民を自由なまま放っておくことによって処刑なさらないでください」

副官はこう言って、願っている。君も聞いているとおりで。

これほど憐れみ深く、また力を持っておられる支配者が、ささやかな人物のささやかな願いを聞き届けられるお方が、最も愛されておられる副官の何よりも素晴らしい願いを聞き届けられないということがあり得ようか。この愛されるお方の願いは、大衆の願いでもある。そして支配者のお氣に在ることであり、またその慈悲と正義の要するところでもある。そのお方にとっては容易なことであり、困難ではない。この客間にある一時的な楽しみの場合ほどにも重いことではないのである。例えを示されるためだけの5、6日の旅のために、これほどの財力をかけてこの国を作られたのであるからには当然、真の宝物群を、その完全性を、その手腕を、国の中枢において然るべき形で示されることであろう。然るべき展示の場を設けられることであろう。そして皆の知性を驚かせることになるであろう。

つまり、この試練の場にいる者たちは、放って置かれているわけではない。幸福の宮殿や牢獄が彼らを待っているのである。

## 六つめの論拠

さあ来なさい、見なさい！この素晴らしい鉄道、飛行機、装備、貯蔵庫、陳列、事業などは、覆いの向こう側に偉大な支配者がいて支配を行っていることを示している。このような支配者は、それにふさわしい民を要する。しかしあなたも見ての通り、全ての民はこの客室に集まっている。この客室はと言えば、毎日満たされてはからにされている。全ての民は、方向を定めるためにこの試練の場集まっているのである。この場は常に新しく変化させられている。全ての民は、支配者の貴重な恵みの例や奇跡的なその芸術作品の展示を見るために、この展示場に数分とどまり、観覧していく。この展示場は常に変化する。去る者は二度と戻らず、そこにきた者は必ず去って行くのである。

こういった状況は、次のことを明らかに示しているのだ。すなわち、この客室、この場、この展示場の後ろに永遠の宮殿が、終の棲家が、これらの例で示されている純粋で気高い真実で満たされた庭園が、そして宝庫が存在するのである。

つまり、ここでの努力はそれらのためである。ここでは働かされるが、あちらではその報奨が与えられるのだ。それぞれの領分に応じた幸福が存在するのである。

## 七つめの論拠

来なさい、少し歩きまわってみよう。この文化的な住民についてみてみよう。

ほら見なさい！あらゆるところにいろいろなカメラが備え付けられ、記録している。見なさい、あらゆるところに書記官がいて、何かを書き記している。全てが記録されているのだ。最もささやかな奉仕、最も些細な出来事でさえも、記録されている。

ほら、あの高い山には、支配者専用の大きなカメラが設置されている。この地でどんなことだ起こっているかと、全てが記録されている。つまりそのお方は、その領土で起こるあらゆる出来事を記録することを命じられたのである。すなわち、その偉大なお方は全ての出来事を記録されているのだ。このような注意深い保持は当然、ある勘定を目的とするものである。

ここで、最も些細な民の最も些細な行動でさえ忘れられることのない、全てを保持されるお方が、その民のうち偉い人たちの、最も重要な行動の記録を保持されず、報奨や罰を与えられることがないということがあり得るだろうか。

しかし、そのお方の尊厳や熱意に反するような、そのお方の御慈悲が決して受け入れることのないような行動が、その最もえらくあるべき人々によって行なわれており、ここではその罰を受けることもない。

つまり、偉大な裁きに任されているのである。





## 教育の責任—ムハンマド・ヌール・スウェイドの『預言者の子供教育法』より—

「世の中に仕事の数は多く、どれもみな尊いものではあるけれど、『人を育て、人を活かす仕事』、すなわち教育以上にやりがいのあるものはない。アッラーがお許しくださるならば、僕は日本で生きるムスリム後進のために生涯を捧げたい。」という思いで留学に来てから、もうじき5年の月日が流れる。教育者としての資質を得るには、道はまだあまりにも遠く、おそらくこの先もずっと「学んだものを教え、教えることで学ぶ」のだろう。(もちろん、それで本望である)

「教育」への個人的な思いは熱く、汲めども尽きぬものがあるが、時間の都合からここでは以前訳し始めて途中で遺跡と化しつつある『預言者の子供教育法』の前置きを一部抜粋したかたちで紹介したい。

### 記

保護者の皆さん、子供への責任をどこかへ投げ捨ててしまっただけでは、二倍の懲罰を受ける羽目になるでしょう。(二倍の懲罰とは)子供という聖なる宝石そのものを汚したことへの大きな懲罰、そしてそれがゆえに社会一般への貢献を台無しにしてしまう犯罪に対してのそれ相応の懲罰です。

ですから、御使いさま(祝福と平安あれ)も両親は子供の教育の全責任を負わねばならないと論じておられます。教友イブヌ・ウマル(アッラーのご満悦あれ)が伝えるには、彼はこう言っています。

「私はアッラーの御使いさま(祝福と平安あれ)がこう言っているのを耳にしました。『あなたがたは全員が羊飼い(保護者)であり、自分が世話をすべき羊たちの責任者です。指導者は(社会、地域、一団の)羊飼いであり、自分が関わるものの責任者です。男性は自分の家族を守る羊飼いであり、自分が関わるものの責任者です。女性は夫の家庭を守る羊飼いであり、自分が関わるものの責任者です。召使いは使える主人の財産を守る羊飼いであり、自分が関わるものの責任者です。あなたがたそれぞれが皆、自分の関わるものの羊飼いであり、

責任者なのです。』(ブハーリーとムスリム出典)

御使いさま(祝福と平安あれ)は、ここに教育の基本原則を指摘しておられます。子供は両親の宗教に沿って育てゆきがちなほど、父親と母親という両人が子供に与える影響は強いのです。

ブハーリーは、教友アブー・フライラ(アッラーのご満悦あれ)に由来するハディースを伝えています。曰く、「アッラーの御使いさま(祝福と平安あれ)は言われました。『すべての生まれし者は、フィトラ(真理へ到達し得る天性、本然)のもとに生まれます。つまりは両親がユダヤ教徒にしたり、ゾロアスター教徒にしたり、キリスト教徒にしたりするのです。あたかも動物が何の欠陥もない子供を産むように、です。生まれたての子供に何か欠けているものがあるように見えますか。』

それから教友アブー・フライラは、アッラーの御言葉を借りて言っています。

『アッラーが人間に定められたフィトラ(天性)にもとづいて。アッラーの創造に、変更はない。それこそは正しい教えである。』(30・30)

また何よりも至高のアッラーが父母に向かって子供の教育を命ぜられ、奨励し、その責任を負わせられたことは、次の御言葉からも明らかです。

『汝ら信仰する者よ、人間と石を燃料とする火獄から、汝ら自身と汝らの家族を守りなさい。そこには厳格で痛烈な天使たちが(任命されて)いて、かれらはアッラーの命じられたことに違犯せず、言いつけられたことを実行する。』(66:6)

教友アリー・ブン・アビー・ターリブ(アッラーのご満悦あれ)に由来する伝承では、『火獄から、汝ら自身と汝らの家族を守りなさい。』という至高のアッラーの御言葉に関して、「あなたがた自身と家族によいことを教えなさい。」と言われたといわれています。(ハディース学者ハーキムは、このハディースを自著「ムスタドラク」4/494の中で取り上げ、「ブハーリーとムスリムはこのハディースを取り

上げていないが、両者のハディース真贋鑑定基準に適う真正のハディースである。」と述べています。)

ファフル・ラーズィー<sup>5</sup>は、自著のクルアーン注釈書の中で次のように述べています。

『汝ら自身を守りなさい。』とはつまり、アッラーが禁じられたことを一切やめることである。』

そして、教友イブヌ・アッパース（主のご満悦あれ）の弟子にあたるムカーティル<sup>6</sup>は言っています。

「それは、ムスリムが己自身と家族を礼儀正しくしつけ、善行を命じ、悪行を禁じることである。」

さらにザマフシャリー<sup>7</sup>は、クルアーン注釈書

<sup>5</sup> ファフル・ラーズィー Al-fakhr Arraazi (西暦 1150～1210)…本名は、ムハンマド・ブン・ウマル・ブン・アル＝ハサン・ブン・アル＝フサイン・アッ＝タイミー・アル＝バクリー、アブー・アブディッラー、ファフルッディーン・アッ＝ラーズィー。

クルアーン注釈学の先人。一代で哲学やクルアーンとハディースの典拠学、数学や天文学を総合整理した。クラシム族の家系であり、タバスターン出身。生まれは、ライで「ライの説法師の息子」と呼ばれていた。ハワーリズム、そしてユーフラテス川、ホラーサーン地方に移住し、ホラー(هل)の地で臨終を迎える。当時から彼の著作は一般大衆に読まれ、学習されていた。ペルシア語にも堪能であったという。主著に、8巻からなる聖クルアーン注釈書「マフアーティフル＝ガイブ(幽玄界の鍵)」などがある。(アッ＝ズィリクリー著「アル＝アッラーム(碩学たち)」第6巻 P.313 参照)

<sup>6</sup> ムカーティル・ブン・スライマーン Muqaatil Bun Sulaymaan (西暦???～767ヒジュラ暦???～150)…ムカーティル・ブン・スライマーン・ブン・バシール・アル＝アザディー(生まれではなく、家来としての出身地)、アル＝バルヒー、アブ＝ハサン。

クルアーン注釈学の大学者。パルフ出身で、バスラへ移住。やがてバグダードでハディースを伝えるようになり、バスラで他界する。晩年記憶が衰えたか、何らかの理由で、ハディース学の中では「マトルーク＝ハディース(ハディースの放棄されし者)」とされ、伝承経路に彼がいた場合は「ダイフ(弱性)」のハディースとみなされてしまう。(アッ＝ズィリクリー著「アル＝アッラーム(碩学たち)」第7巻 P.281 参照)

<sup>7</sup> アッ＝ザマフシャリー Azzamkshariy (西暦 1075～1144)…本名は、マフムード・ブン・ウマル・ブン・ムハンマド・ブン・アフマド・アル＝ハワーリズムー・アッ＝ザマフシャリー、ジャールッラー、アブ＝カースィム。

宗教学、クルアーン注釈学、言語学、文学における先人のひとり。ハワーリズムのザマフシャル村で生まれ、マッカへ旅をし、長年近所にいたために「ジャールッラー(アッラーの隣人)」とあだ名される。各地を遍歴した後、ハワーリズムのジョルジャーニー村へ戻ってきて、そこで他界する。主著に、クルアーン注釈書「アル＝カッシャーフ」などがある。ムウタズィラ派の徒であることを公言し、タサウウフ(神秘主義)を激しく非難した。(アッ＝ズィリクリー著「アル＝アッラーム(碩学たち)」第7巻 P.178 参照)

「カッシャーフ」の中でこう述べています。

『汝ら自身を守りなさい。』とは罪を避け、神の命に従うことで(達成しうる)。そして『汝らの家族を』とは自らを戒めるがごとく、家族をも戒めることで(達成しうる)のである。』

ですから子供をよく育てるには、過ちを正し、よき習慣をつけさせる絶え間ない努力がなければなりませんし、それこそが預言者や使徒たちのやり方だったのです。たとえば、預言者ヌーフ(平安あれ)は息子を信仰へと呼びかけ続けましたし、預言者イブラーヒーム(平安あれ)は息子たちに唯一アッラーのみを崇めるように忠告し続けました。

ナワウィーは自著「ブスターヌル＝アーリフイー(神を知る者たちの庭園)」の中で、イマーム・シャーフィイーに伝わり、そしてフダイルに伝わる言葉として次のように述べています。

「フダイルが言うには、預言者ダーウード(平安あれ)はこう言いました。「わが神よ、私の息子にもあなたが私に接して下さったように接してください。」すると至高のアッラーが彼に啓示を下されました。『ダーウードよ、そなたがわれに接したように息子もわれに接するよう、そなたの息子に言うのです。そうすれば、われはそなたに接したように彼にも接するであろう。』」

それゆえにガザーリー(アッラーのお慈悲あれ)は彼の書簡「アイユハ＝ワラド(息子よ)」の中で、教育の意味するところは農作物がよく育つように雑草を取り除き、とげを引き抜く農家の仕事に似ている、と関連付けています。

イブヌル＝カイム(アッラーのお慈悲あれ)も両親の子供に対するこの責任に念を押し、非常にためになる言葉を次のように述べています。

「一部の学者は言った。『眷れあるアッラーは審判の日、子供に父親について尋ねる前に、父親に子供について尋ねるであろう。至高のアッラーが『われは人間に、両親にはよくするよう命じた。』(29:8)と仰せられた通り、父親には子供に対して権利と義務があるのと同じように、子供にも父親に対して権利と義務があるのである。至高の御方は、『火獄から、汝ら自身と汝らの家族を守りなさい。』(66:6)とも仰せられたが、教友アリー・ブン・アビー・ターリブ(アッラーのご満悦あれ)はそれについて、「教え、しつけなさい。」と述べてい

る。また至高の御方は、『アッラーに仕えなさい。何ものをもかれに併置してはならない。父母に懇切を尽くし、また近親に親切でありなさい。』(4:36)と仰せられたが、預言者さま(祝福と平安あれ)はそれに関して、「子供たちを平等に扱いなさい。」<sup>8</sup>と言われている。』

アッラーの命は、子供に向けられるよりも先に、両親に向けられています。

至高のアッラーは仰せられました。『貧困を恐れて汝らの子供を殺してはならない。われは子供たちと汝らを養う。子供たちを殺すのは、まことに大罪である。』(17:31)

それからイブヌ＝ル＝カイムはこう続けています。「子供の教育を怠り、放ったらかしにする者は、極めてひどいことをしていると言えよう。子供が非行に走る原因はほとんどの場合親にあり、子供を甘やかし、イスラームの教えの基本とスンナ(預言者さまの範例)の教育を放棄したためである。たとえば非行に走る子供に向かって親が叱りつけると、「父さん、あんたが僕を小さいときにダメにしたんだ。だから今度は大きくなった僕があんたに歯向かってやる。あんたは僕を小さいときに無視した。だから今度は僕が年老いたあんたを無視してやる。」と言って反抗するように、子供の教育をないがしろにする親は、子供を幼いときにダメにしてしまうことで、独り立ちできないまま、結局大きくなってから年老いた当の親の助けにもならない子供にしてしまうのである。」

また、結婚、そして子供の出産は、人間が審判の日に関われ、清算される大きな責任です。

ティルミズイーは、教友アブー・サイード・アル＝フドリー、そして教友アブー・フライラ(兩人にアッラーのご満悦あれ)に由来する次のハディースを伝えています。

「アッラーの御使いさま(祝福と平安あれ)は言われました。「審判の日、しもべは御前に引き連れてこられて問われます。『われは汝に聴覚と視覚、財産と子供を授けなかったか。そして家畜や農作物

を汝のために役立てなかったか。そのうえ汝を一家一団の長にしなかったか。果たして汝はこの日がやってくると思ったか。』そのしもべは「いいえ・・・」と答えます。するとアッラーは彼にこう仰せられるのです。『では今日はわれが汝を忘れるとしよう。汝がわれを忘れたようにな。』

別の伝承では、『われは汝を結婚させなかったか。』ともあります。

子供が成長し、一人前の大人として社会の中で自分の地位を築いてゆく時の光景を目の前で思い描くことができながら、立派な社会人となれるようよい教育をほどこさない人以上に大人としての常識に欠け、自分の愚かさを証明している人があるのでしょうか。

教育とは、両親への子供の権利であって、アッラーからの贈り物ではありません。その点については、預言者さま(祝福と平安あれ)も念を押されています。

「アッラーが彼らをアブラール(孝行者)と呼ぶのは、彼らが親にも子にも孝行したからです。あなたには親への義務があるように、子供への義務もあるのです。」(ブハーリーが「アル＝アダブ＝ムフラド」の中で伝えるハディース)

ナサーイーとイブヌ・ヒッバーンは、真正ハディース集の中で預言者さま(祝福と平安あれ)に由来するものとして次のハディースを伝えています。

「まことにアッラーはあらゆる保護者に対し、保護すべきものを守ったか、台無しにしたかを問い詰められる御方です。(一家の長たる)男には、家族のことまでお尋ねになります。」

アブドッラッザークの伝えるハディースでは、次のようにあります。

「まことに威厳と栄光に満ちたアッラーは、保護すべきものを持つあらゆる者に対し、アッラーの命を実行したか、無視したかを問い詰められる御方です。(一家の長たる)男は、家族のことまで問われます。」

〈原典〉：『預言者の子供教育法』ムハンマド・ヌール・ブン・アブディルハフィーズ・スウェイド著 p. 31-35

<sup>8</sup> 「あなたがた自身が平等に親切かつ優しく接せられることを望むように、何かものをあげるときは子供たちを平等に扱いなさい。」ハディース学者タバラーニーが伝える、教友アン＝ヌウマーン・ブン・バシール由来の真正伝承。「サヒーフ＝ル＝ジャーミー＝ツ＝サギール」1046番参照。

## 『二番目に幸せなこと』 The Next Best Thing

春がやってきました。別れの月である3月をのりこえ、出会いの月である4月になります。新しい場所に行くと新しく様々な知り合いが増え、「友達」になれそうな人も増えていくわけですが、やはり昔からの気心の知れた友達も大事にしたいものです。その「友達」の性別ですが、同性・異性ともにどちらも大切にしたい人はいるものです。「男女の友情は成立しない」と言われがちですが、そんなことはない、成立するものだ。…と、数年前まで私は思っていました。

しかし、トルコ語を勉強していたある時、学習クラスの女性から「恋人はなんていうの」と聞かれた先生（トルコ人の男性）が、「女の人の場合なら erkek arkadaş(ım) (=男の友達) と言えばいいんだよ」と言われて驚きました。「だって男の人で恋人じゃない友達もいるでしょう」と言ったところ、先生は笑って「そうかもしれないけれど、トルコ語では女の子が“男の友達”と言ったら恋人のこと。イスラームでも男女は必要以上に接しないしね」という。彼は預言者の血筋といわれる家系に属する人であったので、一般のトルコ人とは考え方が違うかもしれません。しかし、英語で Boy friend といえば大体が恋人を指すように、ある程度の普遍性のようなものはあるのでしょうか。日本語の「男友達」とはなんとなく響きが違う気がします。

何故そのように言われているのでしょうか？異性同士では互いのことを心配したり気遣ったり、一緒に何かしたりする際にどうしても「友情」以外の感情が働きやすいのでしょうか。かといって、同性同士の友達にまったく打算がないとはいえません。色々な感情は男女の別なしに絡んでくるものです。ですが、異性同士の友情がうまくいかないといわれているのには、この「友情」以外の感情が恋愛感情に似たものになってしまうことに原因があるのかもしれませんが。これは同性同士の場合、あまりないことだと思います。

友達と恋人はどう違うのでしょうか。私はこのことを高校生のころよく考えていましたが、当時私が出した結論は「ほとんど変わらないじゃないか。それなら一人の恋人との関係を保つより、たくさんの友達と一緒にいて楽しく過ごしたほうがいい」というところでした。でも、このように考えるということ自体、既に同性の友達とは違う感情が働いているような気がします。しかも、そうやって何か違う感情が働いている中、その男女の友情の微妙なバランスが崩れるとどうなるのでしょうか。その一例（映画ですからかなりドラマティックでとんでもない話ですが）を描いた映画として『2番目に幸せなこと』をご紹介します。

ロスでヨガのインストラクターをするアビー（マドンナ）は、カクテルに酔った勢いで親友でゲイのロバート（ルパート・エベレット）と一夜限りの関係をもってしまい、妊娠してしまいます。子供を持つことを熱望するアビーでしたが、ロバートは自分がゲイだということゆえに悩みます。しかし、夫にはなれなくても父親にはなることを決意し、親友同士と愛する子供との共同生活が始まりました。「生活は一緒にするけれど、人生は別々に。お互い恋人を見つけましょう」と軽く言いあう二人でしたが、やがてアビーに恋人ができて結婚を望むようになると事態は複雑に変化していきます。子供の親権をめぐり、アビーとロバートとの言い争いは法廷へと発展してしまいますが…。

なんとも現代的な設定で、明るい調子の前半と打って変わり、後半、子供の本当の父親が判明するあたりからどんどん深刻になっていきます。映画を見ていない方には申し訳ないのですが、この子供は実はロバートの子供ではなく、アビーの前の恋人の子供だったのです。そのことが判明してさえ子供に愛情をそそぎ、別離に際しては親権をえようとするロバートでしたが、本当の父親でさえ親権を得るのは難しいことです（映画『クレイマー・クレイマー』で憤った人も多いと思います）。この場合は更に生物学上の父親ではない者が親権をとろうとしているので、ほぼ不可能なのです。そんな風に、「育ての親と子供」の關係に注目してみるのもよいですが、今回は友達、というところに視点をしぼっています。アビーとロバート、この二人は互いに親友と言っていますが、果たしてそうなのでしょう？映画を見ていくと、結局相手に自分の都合のよいところだけしか話をせず、「親友」という割りに相手のことを考えていないアビーの勝手さが目に付きます。確かに、「友達」や「親友」だからといって、すべてを話す必要はありません。ですが、「一緒に楽しく過ごせること」だけが友達の条件ではないだろう、友達というからにはそれなりの配慮や思いやりが必要なのではないだろうか、と勝手に思ってしまう。しかし友達の定義も難しいもので、人によって様々です。時々、「出会った人はみんな友達」という人もいますが、私にとっての「友達」は自分で責任を持って付き合えること、困っていたら何を置いても助けてあげられること（みんなが同時に困ると私も困ってしまいますが）、おかしいと思うことがあったらはっきり言ってあげられること、それで縁が切れないことなどの共通をあげることができるように思います。

異性である、というだけでこのように相手を思いやることが出来ない、などというつもりはありません。ですが、お互いにただの友達である、恋人にはならない（なるつもりはない、なりたくない……等）と置いてさえ、男女の仲になりうる可能性もあるわけです。それゆえ、それなりの配慮、注意が必要なのでしょう。よくある話ですが、片方が友達だと思っても、もう片方はそう思っていない場合もあります。男女の友情というものにはやはり微妙なバランスが必要なようです。

こんなことを書いてきましたが、もちろん私には今でも異性で「友達」と呼べる人はいます。同性同士にはない考え方を教わったり、色々な話を聞いたりすることが出来、信頼し尊敬しています。ですが、昔と違い、異性の友達と二人きりで会うことはありませんし、メールや手紙のやりとりの内容にも注意を払っています。ちょっと面倒でもありますが、それで消えていった異性の「友達」もあり、それはそれでよかったのだと思っています。

皆さんも新しい出会いの多いこの季節、自分と友達の關係を見つめなおしてみたいかがでしょう。

---

『二番目に幸せなこと』 2000年 アメリカ 108分

監督：ジョン・シュレシンジャー

出演：マドンナ（アビー）／ルパート・エベレット（ロバート） ほか





(Oxford) City Centre へ

ヒースロー空港のバス乗り場で、city centre 行きのバスに乗り、ガチガチに緊張しながらも、何とかチケットを購入できた。二人がけ（長距離なので）のシートにおさまると、バスが動き出した。

オクスフォードへの道のりはとても短く感じられた。友人とは長い間会えなかったので、ききたい話、話したいことが途切れることはなかった。途切れないのに、窓から見える景色に思わず「わ～!」「うお～!」となり、二日間飛行機に乗ってきたことも何のその、頭がフル回転だった。

何に「わ～!」「うお～!」だったかという、何といっても、家、その他の建物の外観が日本とは全然違うのだ。山や畑などの風景も、私は大好きなのだが、この建物の感じの違いは強烈な印象だった。私、イギリスに来たんだ、という実感がはっきり湧いた。

耳も目も全開の状態のまま、バスは city centre に到着した。そこは遠くから来たバス用のターミナルだったので、普通路線用のバス停群のあるところへ移動する必要があった。雨が降った後らしく、道路は若干湿った感じだった。歩道は石が並べられてできていて、非常に風情があった。見回すと、その辺りにある全ての建物に年季が感じられ、趣のある外観に惹きつけられ、まずどれを見たものか迷うほどだった。それでいて、親しみも感じられる、不思議な場所だった。

Sainsbury

友人のお宅へ行く前に、買い物をすることになった。City centre の中心的な通りに面している、Sainsbury というスーパー。空港の免税店などで、徹底的に「見てるだけ」だった私は、俄然元気になって、早速自分でも買い物をしてみることにした。

まだ値段の感覚を完全にはつかめていなかったのだが、この Sainsbury のお店をくまなく見て回ったことで、「金銭感覚のお勉強」が進んだと思う。結局、私はこのお店がすっかり気に入って、友人に「良いですね、このお店、こりゃいいですよほんと。」と感想を述べた。

イギリスと日本の商品で、私が発見した一番の違いは、「Suitable for Vegetarian」(ベジタリアンの人にも適応)の表示、または緑色の葉っぱがVの形に重なったマークがあることだ。これがあることで、結果的にハラール・ハラームが一発で判断できるのだ。たとえば、お菓子など、一見大丈夫そうで、たまにどちらか迷うようなものも、イギリスのこのシステムでは即判断がつく。

私の大好物となった「フィンガー」というお菓子や、ボリュームたっぷりのジャム入りクッキーなどの他に、日本でいう「〇〇の素」のようなもの、例えばグレービーソースの素などにも、Vマークがついていた。そう、グレービーソースの素にもベジタリアン用があるのだ!

もう一つの大きな発見は、牛乳の入れ物が、紙パックではなく(紙パックのものもあったような気がする)、プラスチックのボトルで、持ち手

がついていることだ。後で飲んでびっくりしたのだが、牛乳の味が濃い！ものすごく濃くておいしい。紅茶に入れると、日本のミルクティーとは、コクが全然違うのだ。これは、どこへ行っても感じたことだった。

さらに、100パーセントのオレンジジュース（紙パック入り）が他のものに比べて安いことに感激し、GREENという銘柄の、オーガニックらしいホワイトチョコレートを発見し、好物を手に入れた満足感でいっぱいになった。

レジは、一列に並んで待つ、キャッシャの番号が上にある表示機に点灯し、同時に自動アナウンスが流れるので、その番号のところへ行くという形だった。こんな形を経験したことがなかったので、順番にスピーチをするかのように緊張してしまった。番号が分からなかったらどうしようと思ったが、表示を見ればいいんだと自分を落ち着かせた。私の番になって、多少、動きがロボット的になっていたような気もするが、一応、無事支払いを済ませた。

その後、Sainsbury を出て、歩道をはさんですぐ近くのバス停に向かった。もう暗くなっていたが、Sainsbury と同じ通りに、BORDERS という大きな書店があることを発見した。今度行ってみようと思った。

バスは、番号が決まっているので、番号さえしっかり確認すれば大丈夫だった。「あ、2番が来てる、これこれ！」ということで、旅行の荷物を持っているのもものともせず、ドタドタと走って乗り込んだ。

友人宅の近くのバス停へは、ほとんど一本道だった。日本のように、バス停の名前をアナウンスしてくれないから、景色を見て、ここだと判断してボタンを押さないといけないのだと、友人が説明してくれた。一度、間違えてボタンを押してしまった時は、責任を取ってそこで下り、そこから歩いたという話もしてくれた。私は、窓の外の景色をみて、一本道ということもあり、こんな全然分からないよ～！と愕然とした。・・・つづく





つい先日、5年来の付き合いの友人とその家族が日本での留学を終えて故郷のエジプトに帰った。アスタグフィルツラー、結婚してから約4年間というもの、距離的な理由もあってたまに電話をするぐらいでこれといった付き合いはしていなかったが、電話をするたびに「会えなくて寂しいよ。」と私を妹のように思ってくれた。彼らとの交流はたまたま私が大学院で夏のコースに参加したとき、ご主人と席が隣どうしになったことから始まった。今思えば、それがきっかけとなってイスラームへと導かれたのだから運命としか言いようがない。

帰国する前日、うちに泊まるということだったので、帰る前に思い出話でもして別れを惜しもうなどと思っていたが、東京へ来るのにも長旅をしてきた彼らは疲れているし、早く寝て明日の旅に備えたいということでほとんど話もせず眠りについた。次の日も出発の時間が朝早かったので準備に追われ、気が付くともう彼らは「またね。」と言って去っていった。5年も日本にいたのに最後は本当にあっけなかった。インシャアッラーいつの日かまた会えるだろうという思いがあるからまだいいが、やり直しのきかない人の死はきっとこんな風に突然きてあっけなく終わるものなのだろうと一人帰りの車の中で考えていた。感謝の気持ちを表そうとしてもきっと不十分なまま誰かがいなくなって、後々後悔するのではないか。そうなる親や周りの友人たちにも日頃から親切にしなければいけない。特に自分の死にも備えなくてはならないと思った。死というものを考えるのは信仰の上で大切だと知ってはいるがそれを四六時中こころに留めておくのは難しい。しかし友人との別れのように、死がこんな風にあっけなくくるものだとしたら本当に恐ろしいという感覚に襲われた。自分は日々何をしているのだろうか。アッラーの私に対する慈悲に比べたら私はアッラーに感謝という感謝をしていない。もう少しムスリムとしてしっかりしなくてはと思った。

これはさておき、友人家族と大学ですごした約一年間から思い出されたのは、エジプト料理を作っていた家に呼んでくれたことや、アラビア語のアルファベットを教えてくれたこと。さらに私がムスリムになったその日に感謝の祈りをささげ、エジプトの家族にまで連絡して喜んでくれたこと、ラマダーン中に毎日一緒にすわってスーラ（クルアーンの章）の暗記を手伝ってくれたり、一ヶ月の間毎日家に呼んで礼拝やイスラームのいろはを丁寧に教えてくれたことなどだ。その親切さ、誠実さ、熱心さは友人の性格的なものもあるだろうが、アッラーが人間に与えた本来の姿、すなわちフィトラなのであろう。これを思うとこれをお与えになったアッラーの慈悲の偉大さにぐっと込み上げてくるものがある。先日、話す内容はどうであれ話し手の誠実さが大事だという話のあるシスターとしていたので、友人家族との思い出からその誠実さの大切さ、偉大さにまた心打たれるものがあった。イスラームがどうというより、彼らのイスラームに対する熱心さ、誠実さその他もろもろのことに私の心が動かされたからきっと私もイスラームをもっと知りたいと思ったのだろう。思うにこういう誠実さといった良いものは皆さんが持っているものだと思う。それを示していくことが出来るようにアッラーが助けてくださいますよう祈るばかりである。



### ハンズラー 殉教す

ウフドの戦役が始まった時、ハンズラーはちょうど結婚式を挙げるときであったため、当初から参戦できなかった。彼がウフドの敗戦について知らせを聞いたときは、初夜の妻の寝台を離れたばかりで、齋戒沐浴にもいけぬほどの衝動をうけた。彼はそれをあとまわしにして、手に剣をとるや戦場へかけつけ、群れる敵軍の中に飛び込み戦死するまで戦い抜いた。さて、アッラーの道のために死んだ人の体は義務として、必要ある場合のほかは齋戒沐浴をほどこさないことになっている。ところが彼の場合は、義務である房後の齋戒沐浴をまだ済ませていない。彼のこの過失を知らずに、サハーバはそのまま彼の遺体を埋葬してしまった。ちょうど埋葬せんとする前にみ使いは言った。「私は天使達が、ハンズラーの体を洗っているのを見た。」

アブ・サイドは言っている。「み使いからこの話を聞いたので、私はハンズラーの顔を見に行ったところ、水滴が彼の毛髪からしたり落ちているのを見た。」

み使いはマディーナに帰ったのち色々と問いただして、ハンズラーが齋戒沐浴を延期した事情について明瞭になったところを説明した。この話もまた彼らの剛勇を示すものである。勇敢な人は死のあごの中に飛び込むことを躊躇することはできぬ。ハンズラーは、彼の義務である齋戒沐浴を済ませるひまさえ待つことが出来なかった。

\*\*\*\*\*

### 購読者からのメッセージ

最近のこと、私はある方の文章に触れて、大いに楽しませていただいた。短い一文から想像の羽がはばたき、一枚の絵を脳裏に描いて初めは笑っていたが、やがてそうまでして行われるべき大事な意味があったのかと神妙な気分になった。

さらに、この年までこんな事があるのを知らなかったという事実に唖然とした。

世の中はどんどん変化していき、私が理解できるものもできないものもある。しかし、この事に関しては周知の事実だったはずだ。

書店では入手できない雑誌『やすらぎ』がなければ、私は知り得なかった事実だった。

『やすらぎ』に感謝しつつ、今なお不思議な気持ちでいる。

ひと葉

購読価格(郵送料込み) バックナンバーは、1部 200円(日本以外は1部 250円)

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円

国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替 口座番号：00140-4-574489 口座名義：Yasuragi

三井住友銀行 店番号：005 口座番号：7315959 口座名義：Yasuragi

皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> [info@yasuragiweb.com](mailto:info@yasuragiweb.com) [yasuragi\\_nihon@hotmail.com](mailto:yasuragi_nihon@hotmail.com)

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404

「やすらぎ」編集部